

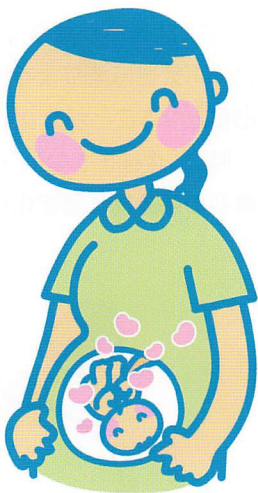
RSウイルス感染症 定期予防接種

説明用ハンドブック

2026年4月1日より

RSウイルス
母子免疫ワクチンは
定期接種（A類疾病）に
位置づけられます

妊娠28週～36週での
接種が対象



● A類疾病とは

予防接種法に基づき、努力義務（接種を受けるよう努めなければならない）が課されている予防接種であり、原則として接種費用は自治体が負担（妊婦の自己負担なし）となります。

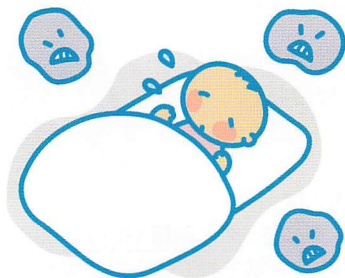


RSウイルス感染症の概要

RSウイルス感染症は、RSウイルスによって引き起こされる呼吸器感染症であり、乳幼児期に高頻度に見られます。

症状は軽いかぜ様症状から、細気管支炎や肺炎などの下気道感染症まで幅広く、重症例では入院管理が必要となることがあります。

特に、生後まもない乳児は免疫機能が未熟であり、最初の感染時に重症化しやすいことが知られています。





罹患頻度と疾病負荷

RSウイルス感染症は、乳幼児期に極めて一般的な感染症です。

世界の疫学研究では、2歳までに約90～100%の子どもがRSウイルス感染症に罹患すると報告されています。

日本では、毎年約12万～14万人の2歳未満の乳幼児がRSウイルス感染症と診断され、約4分の1（約3万人）が入院を必要とすると言われています。

合併症として、無呼吸、急性脳症（脳炎）などがみられることがあり、RSウイルス感染症の後遺症として気管支喘息を残す場合があります。

また、RSウイルス感染による乳児の入院は、基礎疾患のない正期産児でも多くみられることが特徴です。

月齢別の入院発生数は、生後1～2か月頃にピークを迎えるため、生後早期からの予防策が重要とされています。



自然の母子免疫という仕組み

妊娠中、母体内で作られた免疫抗体は、胎盤を通じて胎児に移行します。

この自然に起こる抗体移行の仕組みを「母子免疫」といいます。

母子免疫は、赤ちゃんが生後すぐに十分な免疫を持ってない時期を補い、生後早期の感染症から守るために備わっている、生理的で自然な防御システムです。





RSウイルス母子免疫ワクチンの 国際的な位置づけ

母子免疫の仕組みを活用した予防接種には、現在、RSウイルス感染症および百日咳に対するワクチンがあります。

いずれも、生後早期に重症化しやすい一方、乳児本人への予防接種が難しい時期におこりうる感染症です。

そのため、妊娠中にワクチンを接種することで、母体内でつくられた抗体を、胎盤経由で胎児へ移行させるという考え方が用いられています。

世界保健機関（WHO）は、妊娠中の予防接種（Maternal Immunization）を、乳児の重症感染症を防ぐための有効な公衆衛生戦略の一つとして位置づけています。

RSウイルス母子免疫ワクチンは、百日咳と同様に、この国際的に確立された母子免疫の考え方に基づいています。



なぜ接種時期が特定 されているのか

RSウイルス母子免疫ワクチンは、妊娠24週～36週の方が対象です。

その中でも、妊娠28週～36週での接種が、免疫抗体の胎児移行の観点から望ましい（定期接種は28週～36週が対象）とされています。これは、妊娠後期になるにつれて、胎盤を通じた抗体移行が安定して行われるようになるためです。

接種時期については主治医とご相談ください。



妊娠中の不安・疑問



RSウイルス母子免疫ワクチンの接種を受けることで、自分やお腹の赤ちゃんへの安全性が心配

これまでに世界で10,000人以上の妊婦に接種が行われ、厚生労働省が有効性・安全性を認めているワクチンです。ただし注意を要する方もいますので何か心配なことがあれば必ず医師や看護師に相談しましょう。

参考: [日本産科婦人科学会_母子免疫ワクチン\(妊婦さん向け\)](#) 🔍



起こる可能性のある副反応は？

注射部位の腫れ、赤み、痛み、倦怠感、頭痛、発熱などがあります。血圧の低下・吐き気・失神を引き起こす可能性があるため、接種後一定時間は、注意深い観察が必要です。病院のイスに座るなどして様子を見てください。接種後に気になる症状等がある場合には、医師や看護師にご相談ください。

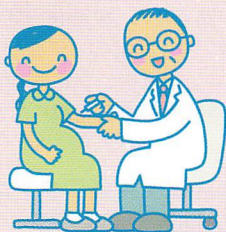


RSウイルス母子免疫ワクチンはどれくらい効果があるの？

臨床試験において、妊娠中にRSウイルス母子免疫ワクチンを接種したお母さんから生まれた赤ちゃんの生後3か月以内の下気道疾患の重症化予防効果は81.8%、生後6か月以内でも69.4%であることが示されています。

本資料は、RSウイルス母子免疫ワクチンの定期接種化に備え、助産師・自治体職員・看護師などの妊婦を支える皆さんが、基礎的知識を整理し、現場での説明や相談対応に活用することを目的として作成しています。

個別の接種判断や医学的詳細については、必ず医師の説明および判断を優先してください。



制作  特定非営利活動法人
ひまわりの会

協力 日本WHO協会